

第 1 章

解析

1.1 解析の概要

MAIKo TCP の解析では背景事象の除去とトラック情報の抽出の 2 つが必要となる．検出ガスには ^{12}C だけでなく、陽子や ^4He が含まれる．そのため、中性子と陽子、 ^4He との散乱事象を取り除く必要がある．その後、中性子と ^{12}C との散乱事象に対してトラックの情報を抽出する．トラックの情報は中性子と ^{12}C とが散乱した座標、 α 粒子が停止した座標である．anode image から z, y 座標を、cathode image から x, y 座標を決定することができる． x, z 座標は $\mu\text{-PIC}$ の信号を検出した strip のチャンネル番号に $400\mu\text{m}$ をかけることで求めることができる．TPC では、 y 座標を荷電粒子が通過した位置から読み出し面に到達するまでの時間として測定する．そのため、anode image, cathode image の clock にドリフトスピードをかけることで y 座標を求めることができる．このようにして決定した anode image, cathode image の座標を合わせることで、3 次元の座標を求めることができる．

散乱点と停止点の座標から粒子が飛行した方向ベクトルと距離が決定される．粒子が分かれば、飛行距離から運動エネルギーが決まる．図 1.1 に $\text{CH}_4(50\text{ hPa})$ 中での荷電粒子の飛行距離と運動エネルギーの対応を示す．飛行距離と運動エネルギーの相関は SRIM [?] を用いて求めた．SRIM は、荷電粒子が物質中を通過する際の、イオンの飛程、エネルギーロス等を算出するシミュレーションソフトウェアである．この対応関係から粒子の運動エネルギーを決定する．粒子の運動エネルギーを T 、質量を m 、単位方向ベクトルを (dx, dy, dz) とすると、粒子の 4 元運動量は

$$p = \begin{pmatrix} E \\ p_x \\ p_y \\ p_z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} T + m \\ \sqrt{(T + m)^2 + m^2} dx \\ \sqrt{(T + m)^2 + m^2} dy \\ \sqrt{(T + m)^2 + m^2} dz \end{pmatrix} \quad (1.1)$$

となる．決定した 3 つの α 粒子の 4 元運動量を足し合わせることで、 ^{12}C の 4 元運動量を再構成できる．このようにして求めた 4 元運動量から、 ^{12}C の運動エネルギー、散乱角度、励起エネルギーを求めることができる．

1.2 eye-scan

本研究では MAIKo TPC から得られたトラックの解析を人間の目 (eye-scan) で行った．eye-scan では、トラックの本数の識別と散乱点、停止点の抽出を行った．ここではトラックの本数が 3 本であるイベントを $^{12}\text{C}(n, n')3\alpha$ イベントとした．本研究では $^{12}\text{C}(n, n')3\alpha$ イベントに対して解析を行った．検出ガスの決定の

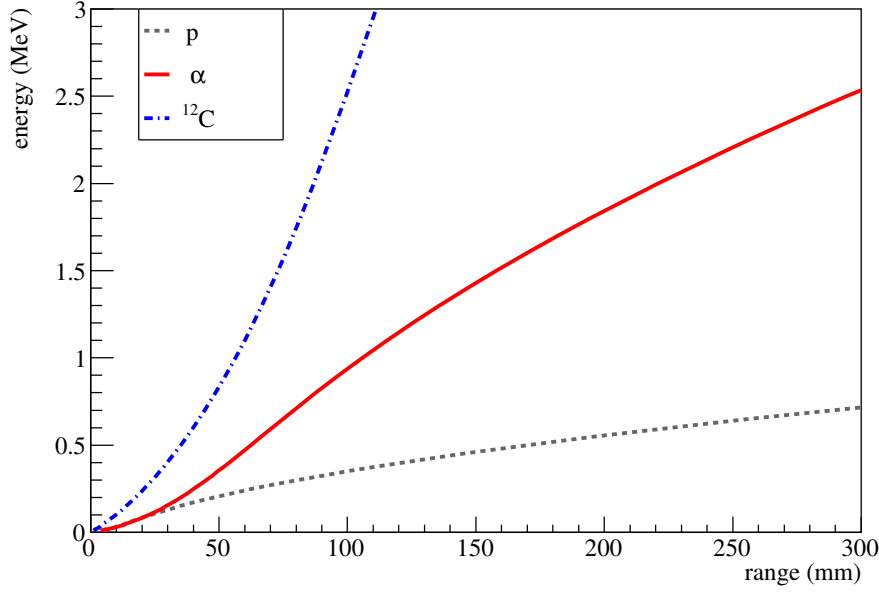


図 1.1: $\text{CH}_4(50 \text{ hPa})$ 中の荷電粒子の飛行距離と運動エネルギー．この相関は SRIM を用いて求めた．

ために，??節のシミュレーションで生成したデータに対して解析を行った．

1.2.1 検出効率

実際には $^{12}\text{C}(n, n')3\alpha$ イベントであっても，各 α 粒子のエネルギーや放出角度，トラックの太さによっては 3 つのトラックを区別することができず， $^{12}\text{C}(n, n')3\alpha$ イベントとして認識できない場合がある．そこで，eye-scan によって正しくトラックが 3 本と認識できる割合（検出効率）を評価する．eye-scan は各検出ガスについて 100 events ずつ行った．検出効率を表 1.2 に示す． CH_4 単体と $\text{CH}_4(4) + \text{He}(6)$ 以外は約 90 % の検出効率となっている．

1.2.2 エネルギー分解能

α 粒子の飛行距離の分解能により，エネルギー分解能が決まる．そこで，eye-scan による α 粒子のエネルギー分解能を評価する．シミュレーションで粒子を生成した時に決定した α 粒子の運動エネルギー (E_{ideal}) と eye-scan によって決定した α 粒子の運動エネルギー ($E_{\text{eye-scan}}$) の相関を図 1.2, 1.3, 1.4, 1.5, 1.6 に示す．縦軸がシミュレーションで決定した運動エネルギー，横軸が eye-scan で決定した運動エネルギーである．

この相関に対して 1 次関数 ($E_{\text{ideal}} = p_0 \times E_{\text{eye-scan}} + p_1$) でフィットした結果を表 1.1 にまとめる．どの検出ガスについても，ほぼ $E_{\text{ideal}} = E_{\text{eye-scan}}$ となっている． $E_{\text{eye-scan}}$ をフィットした 1 次関数 ($f(x)$) で補正したエネルギーと E_{ideal} と差分を dE ($= E_{\text{ideal}} - f(E_{\text{eye-scan}})$) とする．各検出ガスでの dE の分布を図 1.7, 1.8, 1.9, 1.10, 1.11 に，ガウス分布でフィットした中心値と分散を表 1.2 に示す．エネルギー分解能は， $\text{CH}_4(3) + \text{H}_2(7)$ の場合に最も小さいことが分かる．

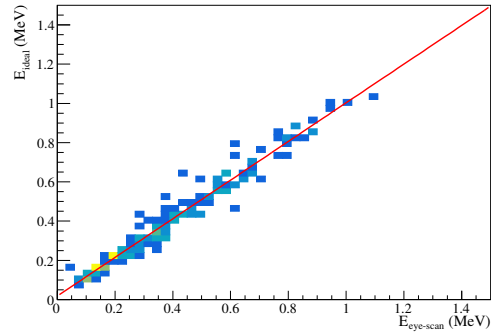


図 1.2: CH_4 の場合の
 $E_{\text{eye-scan}}$ と E_{ideal} の相
関.

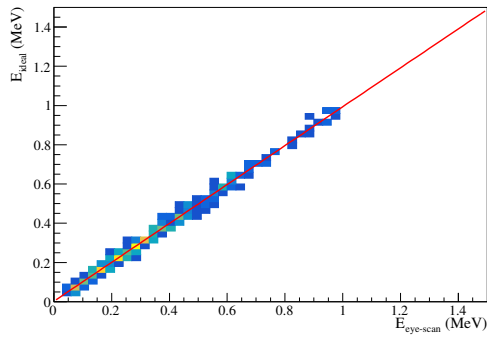


図 1.3: CH_4 (3) + H_2 (7)
の場合の $E_{\text{eye-scan}}$ と
 E_{ideal} の相関.

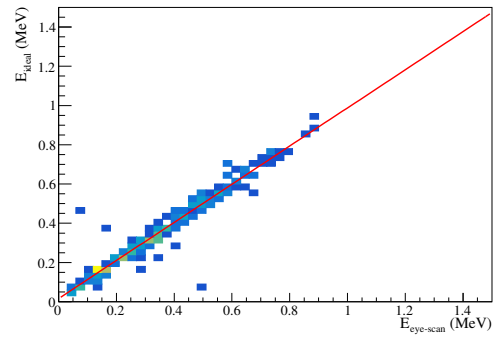


図 1.4: CH_4 (4) + He (6)
の場合の $E_{\text{eye-scan}}$ と
 E_{ideal} の相関.

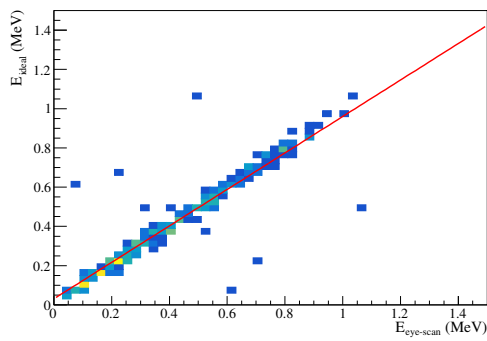


図 1.5: iso-
 C_4H_{10} (1) + H_2 (9)
の場合の $E_{\text{eye-scan}}$ と
 E_{ideal} の相関.

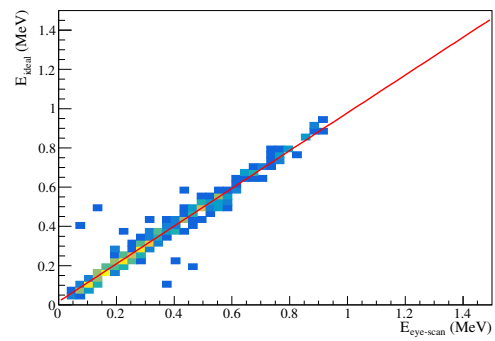
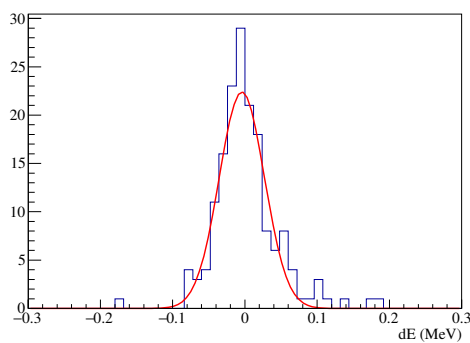
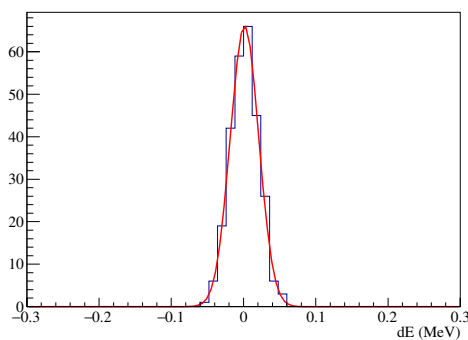
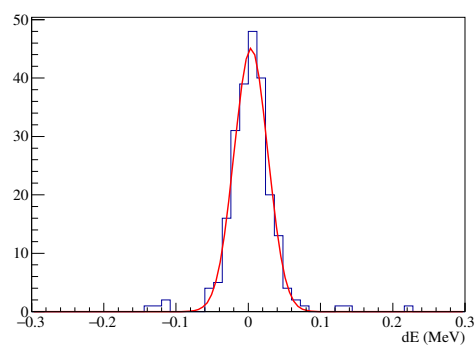


図 1.6: iso-
 C_4H_{10} (1) + He (9)
の場合の $E_{\text{eye-scan}}$ と
 E_{ideal} の相関.

表 1.1

gas	p_0	p_1
CH ₄	0.985	0.0179
CH ₄ (3) + H ₂ (7)	0.991	0.00260
CH ₄ (4) + He (6)	0.972	0.0157
iso-C ₄ H ₁₀ (1) + H ₂ (9)	0.929	0.0309
iso-C ₄ H ₁₀ (1) + He (9)	0.962	0.0166

図 1.7: CH₄ の場合の dE .図 1.8: CH₄ (3) + H₂ (7) の場合の dE .図 1.9: CH₄ (4) + He (6) の場合の dE .

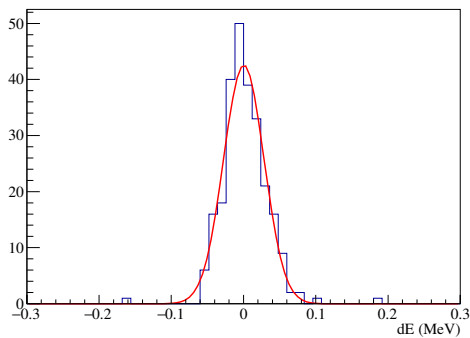


図 1.10: iso-C₄H₁₀ (1) +
H₂ (9) の場合の dE .

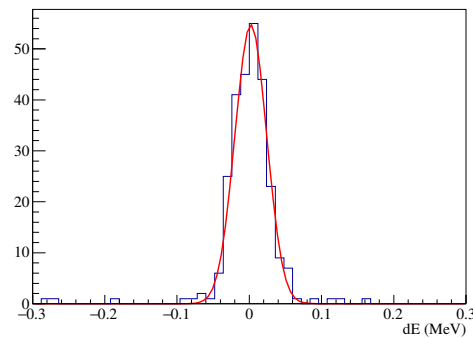


図 1.11: iso-C₄H₁₀ (1) +
He (9) の場合の dE .

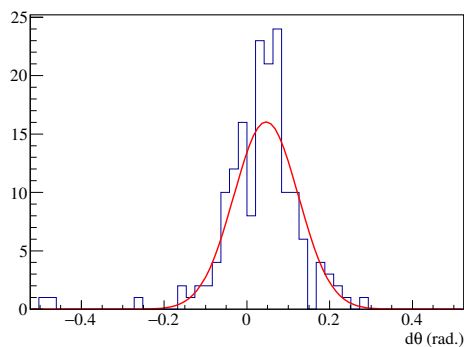


図 1.12: CH₄ の場合の角
度差.

1.2.3 角度分解能

シミュレーションで決定した α 粒子の角度と eye-scan での角度の差分を $d\theta$ とする．各検出ガスでの $d\theta$ の分布を図 1.12, 1.13, 1.14, 1.15, 1.16 に、ガウス分布でフィットした中心値と分散を表 1.2 に示す．角度分解能は、CH₄ 単体の場合に大きいことが分かる．

1.2.4 励起エネルギー分解能

測定で ¹²C, 励起エネルギーの分解能が悪ければ各励起状態を特定することができない．シミュレーションでは Hoyle 状態経由での崩壊を考えているので、¹²C の励起エネルギーは 7.65 MeV となっている．eye-scan で決定した ¹²C の不変質量から基底状態の ¹²C の質量を引くことで励起エネルギーを求め、7.65 MeV を再構築できるか評価する．各検出ガスで再構成した励起エネルギーを図 1.17, 1.18, 1.19, 1.20, 1.21, 表 1.2 に示す．どの検出ガスにおいても Hoyle 状態を再構成できていることが分かる．Hoyle 状態と隣り合う ¹²C の励起状態は 2₁⁺ の 4.44 MeV と 3₁⁻ の 9.64 MeV であるので、分解能も隣り合う励起状態と分けるのに十分良いことも分かる．

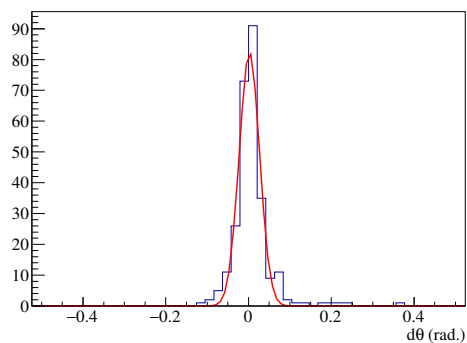


図 1.13: CH_4 (3) + H_2 (7) の場合の角度差.

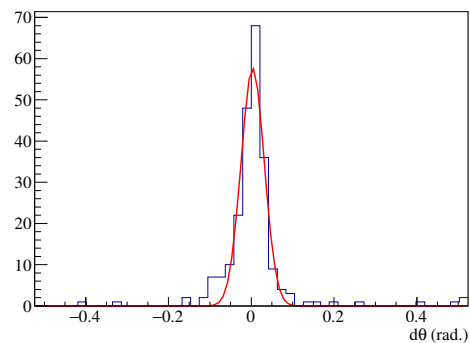


図 1.14: CH_4 (4) + He (6) の場合の角度差.

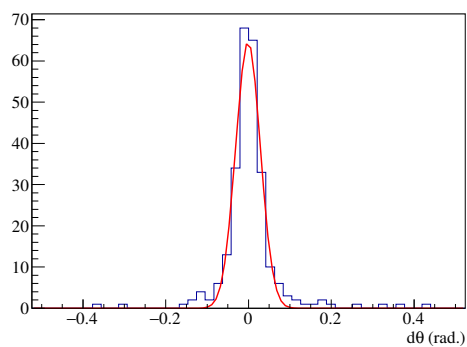


図 1.15: $\text{iso-C}_4\text{H}_{10}$ (1) + H_2 (9) の場合の角度差.

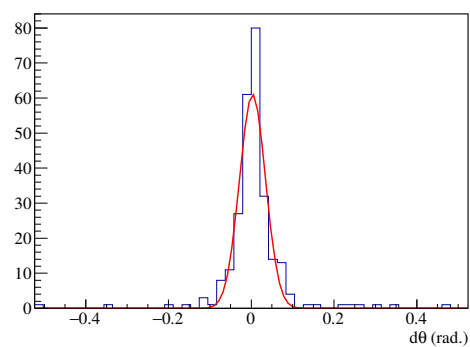


図 1.16: $\text{iso-C}_4\text{H}_{10}$ (1) + He (9) の場合の角度差.

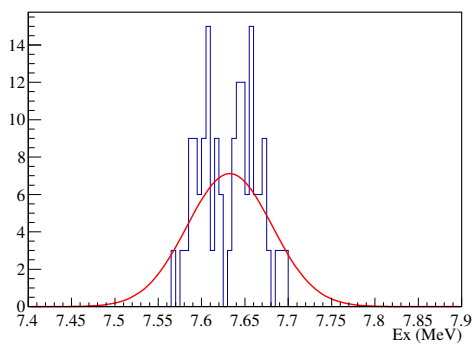


図 1.17: CH_4 の場合の ^{12}C の励起エネルギー.

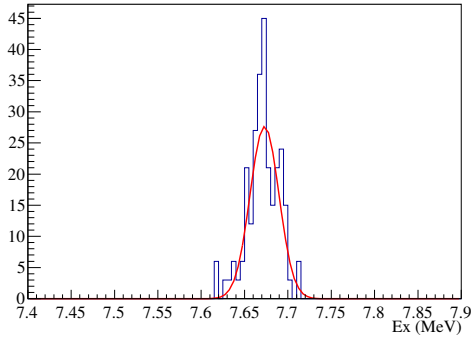


図 1.18: CH_4 (3) + H_2 (7) の場合の ^{12}C の励起エネルギー.

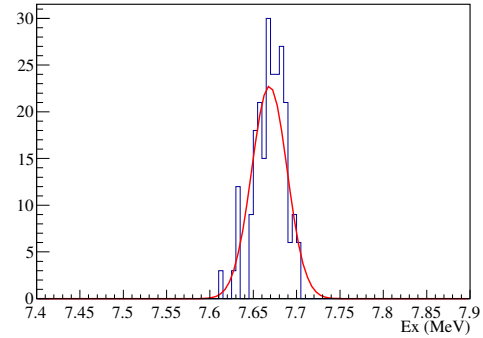


図 1.19: CH_4 (4) + He (6) の場合の ^{12}C の励起エネルギー.

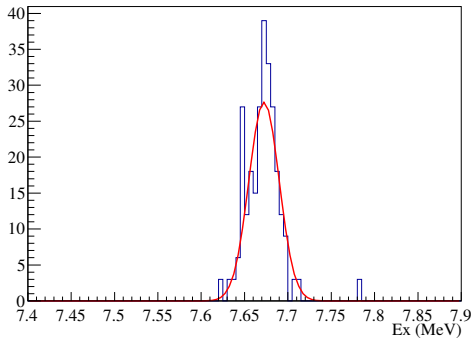


図 1.20: $\text{iso-C}_4\text{H}_{10}$ (1) + H_2 (9) の場合の ^{12}C の励起エネルギー.

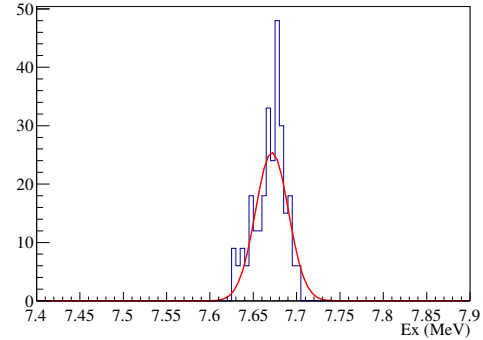


図 1.21: $\text{iso-C}_4\text{H}_{10}$ (1) + He (9) の場合の ^{12}C の励起エネルギー.

表 1.2: 各ガスの検出効率と分解能. それぞれ 100 events ずつ eye-scan によって解析を行った.

gas	検出効率 (%)	$dE \pm \sigma$ (keV)	$d\theta \pm \sigma$ (mrad)	$\text{Ex} \pm \sigma$ (MeV)
CH_4	55	$-4.21 \times 10^{-3} \pm 3.13 \times 10^{-2}$	46.4 ± 77.9	$7.63 \pm 4.91 \times 10^{-2}$
CH_4 (3) + H_2 (7)	91	$1.36 \times 10^{-3} \pm 1.97 \times 10^{-2}$	2.10 ± 24.6	$7.67 \pm 1.66 \times 10^{-2}$
CH_4 (4) + He (6)	78	$3.75 \times 10^{-3} \pm 2.34 \times 10^{-2}$	3.34 ± 28.2	$7.67 \pm 2.05 \times 10^{-2}$
$\text{iso-C}_4\text{H}_{10}$ (1) + H_2 (9)	87	$3.75 \times 10^{-4} \pm 2.80 \times 10^{-2}$	-1.27 ± 29.8	$7.67 \pm 1.75 \times 10^{-2}$
$\text{iso-C}_4\text{H}_{10}$ (1) + He (9)	90	$2.14 \times 10^{-3} \pm 2.20 \times 10^{-2}$	3.05 ± 31.4	$7.67 \pm 1.90 \times 10^{-2}$

1.3 検出ガスの決定

ディフュージョンとトラックの幅の観点では CH_4 (3) + H_2 (7), iso- C_4H_{10} (1) + H_2 (9) が良い. 検出効率は CH_4 (3) + H_2 (7), iso- C_4H_{10} (1) + H_2 (9), iso- C_4H_{10} (1) + He (9) が良い. α 粒子のエネルギー分解能の観点では CH_4 (3) + H_2 (7) が良い. 角度分解能の観点では CH_4 (3) + H_2 (7), iso- C_4H_{10} (1) + H_2 (9) が良い. これらから考えると, CH_4 (3) + H_2 (7) または iso- C_4H_{10} (1) + H_2 (9) が適すると判断できる. CH_4 (3) + H_2 (7) と iso- C_4H_{10} (1) + H_2 (9) とで含まれる ^{12}C の量を比較すると, iso- C_4H_{10} (1) + H_2 (9) の方が $4/3$ 倍多い. よって, 検出ガスには iso- C_4H_{10} (1) + H_2 (9)(100 hPa) を用いる.